



23

「選」

選ばれることに敏感になりすぎる瞬間がある。

誰かに選ばれなきゃ。

その思いが、いつの間にか胸の奥に根を張った。

誰かに選ばれなきゃ。

その後に続く言葉ってなんだろう。

「意味がない」？「価値がない」？

あるいは、「終わりだ」？

ある時の僕は、NOをつきつけることができる。

そんなことないよ。

大丈夫だよ。

焦ったっていいことなんてないよ。

でも、またある時の僕は、できない。

誰かの声が耳元で聞こえ、

誰かのようにやらなきゃだめと言われている気がして、
選ばれることが絶対の世界に引きずり込まれてしまう。

ふたつの異なる考えが僕の中にあり、綱引きする。
まるで自分がふたつに分裂してしまったかのように。

選ぶことと選ばれることは表裏ひょうりいつたい一体だ。

誰しも日々、何かを選びながら生きている。

朝の服装、食べるもの、歩く道。一見、自分の意志で決めているようで、実は見えない糸に導かれていることもある。

たとえば、先日立ち寄った惣菜コーナーでのこと。口内炎ができた舌は刺激の強い食べ物を自然と避け、迷うことなく手に取ったのは、「栄養士監修」と大きく書いてある15品目（！）のお弁当だった。

あの瞬間、「選んだ」のではなく「選ばれた」気がした。

店頭に並んでいた弁当たちはみな、誰かに手に取ってほしいと静かに待っていた。からあげ弁当は普段の自分のような腹ペコさんに、五目弁当はあれもこれも食べたいグルメさんに。

そのなかで僕は選び、選ばれたのだ。

選ばれたならいいが、選ばれなかったときはつらい。

特にその瞬間、渦中かちゅうにいる場合は、深く傷つき、世界から色が消える。思い入れが強いほど、立っているのがやっとで相手を思いやるなんて正直できない。

でも、そんな経験を何度もした自分だからこそ言えることがある。

「選ぶことがえらいわけではない」し、
「選ばれることがえらいわけでもない」と。

どちらも、ただ日常にある営みにすぎない。案外、気まぐれな基準で決まっていたと知ることもある。

そして、選ぶ側は、ほとんど気が付かぬまま次の場面では選ばれる側に移っている。

この不確定で儚い営みが繰り返されているだけなんだ。

そのうち、選ばれようとその場しのぎの体裁ていさいを取り繕うことになんて一切興味がなくなるのだろうか。そんなことを思う。というかそれが理想的だ。

だってこの『オーデイション』は一生続くのだから。

選ぶ、選ばれる。繰り返していく中で、その人の存在が形作られていく。

その選択を、放棄ほうきしちゃだめだと思ってる。